



# 九月の俳句

( 2 0 2 2 / 0 9 )



## 目次

たべもの俳句	モノクロ俳句	歳時記俳句
13	8	1
↳	↳	↳

9月の他の別名

玄月（げんげつ）・菊月（きくづき）・季秋（きしゅう）・色取月（いろどりづき）・小田刈月（おだかりづき）・健戌月（けんじゅつげつ）

（宇佐美保幸）メール・yasuyuki.usami@gmail.com

毎日の俳句は次のブログに

巣鴨とげぬき徒然俳句

<https://blog-haiku.777usami.com>

台風が去って嬉しきマトリョーシカ  
台風だ気象予報士絶叫し  
台風之夜はベッドに飼い犬も  
台風一過脱皮した空があり  
台風一過庭の鉢植え点検す  
野分あとスカイツリーもあたらしき

はかどらぬ庭の雑草秋暑し  
口ずさむ八代演歌や秋暑し

姥捨ては銀河のほとりそれもよし  
座礁船天ノ川にもあまたあり  
故郷はますます遠く天の川  
天ノ川大きな樞吾のため

浄土にもいけず朽ちるか捨案山子  
捨てられた案山子集めて火葬する  
都会の子かかしお化けと思いきり



鶏頭は沈黙守り通しけり  
鶏頭は朝鳴きもせず朝ぼらけ  
鶏頭は百本ありて静かなり

秋暑し黄花コスモス路地に咲く  
秋暑し断捨離犠牲の目も

猫じやらし今時の猫だまされず  
猫じやらし差別を受けて除草剤  
至るところ根を張り育つ猫じやらし  
金色をキンエノコロは自慢げに  
渡米してアキノエノコロ背が伸びて

キーボードタッチする指白露かな  
鉢植えに白露ありけり恵みあり  
庭に草手入れ怠り露の玉



二度咲きの花にも蜜か秋の蜂

いろいろのおのおののくさのはな

花の野に狐の孫がかくれんぼ

富士裾野砲弾あとに草の花

営々と営み続く草の花

ちちろ鳴く誰が調教ちちろ鳴く

ちちろ虫閻魔大王面構え

えんまこほろぎ包丁を研ぎ直す

吾亦紅競争社会並び立ち

どこまでも辛抱きわむ吾亦紅

おもてなし言わぬが花よ吾亦紅

清濁をすべて飲み込み吾亦紅

本心は明かさず咲くや吾亦紅

桜紅葉愛でるひまなく散りにけり



桜紅葉落ち葉となれば余計者  
街路樹の桜もみじの後始末  
桜紅葉電気大学並木道

懐かしく昭和を偲ぶ赤まんま  
ただ揺るぎただそのままに赤まんま

東京をあまねく照らし望の月  
我が家にも届きし光望の月  
反対のダム湖に映る満月や  
芋名月探すうさぎは雲隠れ

窓を開け夫婦で待つや今日の月  
良寛も眺めた月か円通寺  
名月に黙って夫婦珈琲を  
店舗閉じ人影もなし月夜かな

世の中は作用無作用無月なり



コスモスに指揮者はいらす風に揺れ  
コスモスはやはり秋桜風に揺れ

いちめんの秋櫻に風そして風

いまさらに雲は流れる秋櫻も

風を呼び揺らぎ揺らいでコスモスや

秋桜は風を呼びたりなびきたり

コスモスや哲学すれどゆら揺らぎ

ゴミ置き場カンナの花が束になり  
年寄り早く死ぬべしカンナ燃え

ベロペロネ食欲の秋なに求む

踏まれてもそれを喜ぶおおばこや

鰯雲出刃包丁で鱗とる

鰯雲専守防衛団子虫

鰯雲使い切れない空の青



瀬戸の海過疎の港に赤蜻蛉  
赤蜻蛉自動車似合うローカル線

昭和の子塾は無縁に蜻蛉釣り  
鬼やんまぎよろぎよろ目玉なにを見る

秋蝶の寝床はいずこ空に舞う

秋蝶や染井霊園二三匹

秋の蝶たのしげ風に強がりて  
秋の蝶小さくなりて人を恋う

ニュータウン家ごとに庭うすもみぢ

彼岸花同じに見えて多様性

好き嫌いそれを承知で彼岸花

曼珠沙華花は変わらず曼珠沙華  
野に山にそして寺院に曼珠沙華



今年また萩のトンネル写真撮る  
萩に雨多くの花は絶えきれず  
密に咲き少し疎まし萩の花  
多く咲き萩の小花は止めどなく

秋が来てユーチューブ聴く一日を  
ブルービーそしてヒゴタイ瑠璃の秋

季節来て何はともあれ初紅葉



モーロク俳句

モーロクしこもる二百十日かな  
モーロクし台風怖さ忘れけり

モーロクし何を支えに葛の花  
しがらみを捨ててモーロク葛の花  
モーロクし葉隠れの花葛の花

モーロクしさみしき顔で秋刀魚焼く  
焼き秋刀魚モーロクすれど箸さばき

モーロクし天ノ川へと死出の旅  
モーロクし人類化石天の川

モーロクし葉も増えて秋の蝶  
モーロクし叶わぬ想い秋の蝶



モーロクし死ぬまでぼやく秋の蝉  
モーロクし短気の虫も秋の虫

モーロクし触って嘗める白露かな  
重陽やモーロクすれど吟醸酒

愚かしく石榴を食べてモーロクす  
コスモスも揺れてモーロク疲れけり

モーロクしされど見栄はる葉鶏頭  
見栄を張り生きてモーロク葉鶏頭

チチチチツ吾はモーロク鶴鳴  
モーロクすあの世の道に赤ま  
日ねもすやモーロクすれば赤のまま

モーロクし大地は死に地赤蜻蛉



モーロクし話すことなく秋の薔薇

モーロクし終活遅々と吾亦紅  
モーロクし余生の余白吾亦紅  
モーロクし憧れあれば吾亦紅  
モーロクし我が顔忘る吾亦紅

地虫鳴くモーロクすれば地獄とも

モーロクし頭の奥に翹雲  
モーロクし更にモーロク翹雲  
モーロクし言葉少なく翹雲

けふの月すべてを赦しモーロクす

モーロクし蓑虫のごと生きるかな  
吊されて蓑虫の色モーロクす  
鬼の子もモーロクするか糸揺らす



モーロクし骨の痛みや彼岸花  
モーロクし死の闇を見る彼岸花  
モーロクし生きて残され彼岸花  
モーロクしふつふつ雑念秋彼岸  
モーロクし少し疲るる曼珠沙華  
モーロクしなるようになれ曼珠沙華

モーロクし秋の彼岸ももの悲し  
モーロクし遠き日もあり柳散る  
モーロクし私の窓の柳散る

モーロクしあの世に誘う大花野  
モーロクし気遣い言葉大花野  
モーロクし命等しく花野道

モーロクしやぶれ雑巾通草の実  
モーロクし明日こそわと実の芙蓉



モーロクし寝覚めその都度虫時雨  
我も雄モーロクすれば虫の闇

モーロクしまだ残照か青蜜柑  
色づけばそれはモーロク青蜜柑

モーロクしこれが余生か破蓮



たべもの俳句

二百十日機嫌も良くて目玉焼  
台風で避難する前目玉焼き

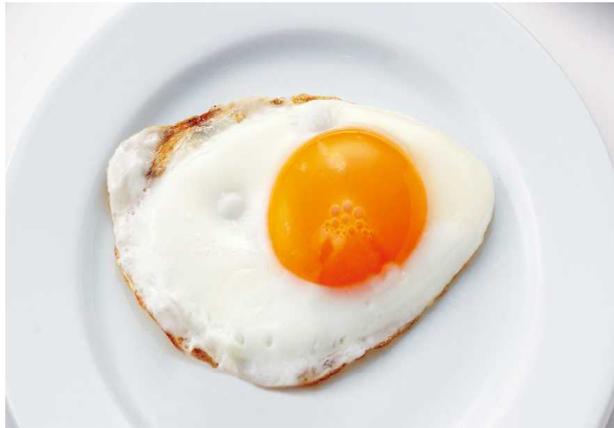
寸胴で煮込むカレーや野分かな  
満月に香りが届くカレーかな

はまる味ゴーヤの佃煮苦みかな  
とろけますへちまと豚のみそ炒め

もろこしをかじる歯もなく老いにけり

秋刀魚喰ふ理路整然と科学者は  
秋刀魚焼く我也近々焼かれけり

ひたむきに赤を競いて唐辛子  
唐辛子干されて色は艶めかし



唐辛子世の中嘆き赤くなり

チャーハンに茸いろいろ夕ご飯  
長芋を梅肉炒め豚肉と

焼き鮭の皮を食べるか迷いけり  
塩鮭の焦げのあんばい虫の秋

「おつけもん」つるむらさきのおひたしに  
太刀魚の鱗借りて光りて塩焼きに

秋なすの生姜煮作り常備菜

秋茄子を焼いて岡山吟醸酒

秋なすがあれば副菜手際よく

エリンギにシメジマイタケ炒め焼き  
お月見にカレーうどんの香りあり



台風に備えて豚汁作り置き  
一工夫レストラン鳳梨サラダ

はんぺんも焼けばステーキ女郎花

和三盆あんパンふわり秋の雲

フランクフルトポカポカポトフタ月夜

「さしすせそ」里芋とイカほっこりと  
いもたこは伝統料理讃岐かな

フランスパンふって応援秋祭り  
富有柿四角き顔は寅さんか

イチジクの甘さ食感白和えに  
ぶどう狩り摘むにあきたる子供たち



パチパチと雷こんにやく稲光  
通ぶってそして気取って新そばを

秋鮭と野菜ガリバタ醤油焼き  
キレのある醤油でしいたけ網焼きを





